

近世期における庶民・商人の旅に関する一考察 一商人としての飛騨屋の旅を考える前提として一

三ツ木芳夫

はじめに

本稿の目的は江戸時代における庶民の旅・商人の旅の特質を考察することにある。

江戸時代の庶民の旅について考え始めたきっかけを述べておく。それは近世期の蝦夷地において企業者活動を開始し、初代から四代に至るまでおよそ90年間もの長期にわたるビジネスを展開させてきた飛州出身の武川久兵衛（飛騨屋）研究に関連する。

企業家であるゆえに、商業活動の一環として数え切れないほどの商用の旅を重ねてきたと思われる。本店を飛騨国益田郡湯之島村におき、そこから当主本人、番頭や手代が消費経済の中心である江戸、飛騨屋の支店がある南部大畑や蝦夷地の松前など家業である木材の伐採・運送・販売ばかりでなく、市場調査・資金収集などの業務のためそれぞれの場所を往復する旅がなされたと予想される。しかし、具体的に企業家・商人としての商用の旅が見えてこない。

蝦夷関連の経営に関する史料の数はまとまってはいるが、いわゆる飛騨屋の旅行記録（道中案内・道中日記）の類は僅少である。「飛騨屋武川家目録」（秋田俊一・高橋伸幸・三ツ木芳夫『飛騨屋武川家文書編年目録』札幌大学女子短期大学部紀要 第27・28・29号 1997年3月刊抜刷を参照）にあたってみたがわずか6点であった。内容をみるとビジネスにかかわる旅と考えられるのは「倍行手控」である。ここには、飛騨屋初代久兵衛が江戸から奥州大畑までの宿里数が記録されている。残り5点のうち2点は「伊勢参宮旅日記」と「旅日記」である。内容は伊勢参りの旅、つまり信仰の旅である。さて、最後の3点のうち「信濃日記」は探泉の旅と考えられる。また、四代目益郷

の筆による「秋葉山道中記」も含めて、物見遊山の旅に分類される。最後の1点である「江戸行之日記」は四代目益郷が卒去したために江戸へ向かった旅にかかわる覚書である。ただし、だれが江戸に出向いたか不明である。

以上の6点の史料を補い、飛騨屋の商人旅をこれから考察していくためにも、本稿で江戸時代の庶民層がどのような知恵や工夫を重ねて旅を続けたかを考えたい。

そこで第1章では、庶民たちが生きてきた江戸という時代の特徴を社会経済史的に捉えていく。それは幕藩体制という政治体制のわく組の下で制約を受けながらも、それ以前の時代とは比べものにならないほど平和な時代の中で経済的豊かさを庶民層は享受していた。そして、そうした豊かさは庶民の旅を助長する要素となったからである。

また本章で取り扱うのは、参勤交代制や新興商人層の台頭である。それは交通網や宿場の整備、商品の流通と運送などが商品経済を活発化させる要因であるにとらえ、そうした影響が庶民の旅そのものを容易にしていたと考えるからである。

第2章では、庶民たちが旅する目的を考察する。寺社参詣の人数を記録したのものによると、享保3年(1718)4月に伊勢山田奉行の幕府へ報告した参詣人数は正月元旦から4月15日までの間に427,000人であるという。宝暦年間(1751～64)ごろになると、四国遍路は年間約100,000人、秩父巡礼は50,000人、越中立山で6,000人。幕末の成田山は15,000人、善光寺は200,000人を数えた。こうした信仰の旅のなかでも伊勢参詣はトップである(今野信雄『江戸の旅』岩波書店、1986年、p78～79より)。このほかにも庶民層が旅する目的として名所見物、三都の芝居見物、湯治、商用の旅などが挙げられる。またそのなかでも、農民たちが他国へ出向くのは、たしかに信仰の旅を目的とするのだがそこにもうひとつの理由がある。自分たちの生活基盤の改善のために、他の地域における新しい農法、肥料、農具、種子などの情報を入手したり、自分の村にとって有益となる情報を得るための旅でもあった。その他、特殊な旅として武者修行やあだ討ちの

旅などもあるが、ここでは信仰の旅と物見遊山の旅を中心に考察を進めたい。

第3章で取り上げるのが商人の旅である。ただし、武士による参勤交代の旅や公用の旅とは異なる旅として特徴的とも言える行商の旅に焦点をあてたい。それは商人の旅の本質が行商に垣間見られるからである。

第1章 庶民が旅する時代環境

戦乱が続いた近世初発の時代においては、庶民が旅することは困難であった。むしろ、一日をどう生きるかが優先された。そうした時代は、まさに庶民の旅を停止させたのである。しかし家康が戦乱の時代に終止符を打ち、庶民たちも新しい時代を迎えることになると、それ以前のどの時代よりも多くの庶民たちが旅するようになった。それは争乱のない平和な時代が到来したことと、徳川幕藩体制という長期的な安定政権のもとで、農業や商品経済の発達が行商の旅を活性化させたからである。

そこで本章では、庶民の旅を容易にした時代がどのような社会環境であったかに焦点をあてる。幕藩制社会の特徴として、身分制、領国制、参勤交代制の三つを概略し、社会的・経済的特性を検討する。そうした特性の中から参勤交代制を取り上げ、庶民にどのような影響を与えたかもあわせて検討する。それは農民や商人たちが武士階級のいわばサポーターとしてどのように生活を展開させていったかを考えてみたいからである。またそこに、庶民の旅を容易にさせる要因があったと思われるからである。

1. 徳川封建社会の特色

江戸期の庶民たちが生活する社会とは次のような枠組みを持った政治体制であった。宮本又次氏によると徳川封建体制とは「武士が封建社会の支配者として全国の土地を所有し、人民を服従させるためにつ

くりあげた封建国家機構である。それは将軍と大名という異質の封建領主による武士の全国的統治体制をいうのであり、わが国封建制度の最後の段階に成立した」と定義する⁽¹⁾。

たしかに関が原の戦いに大勝利を収めた家康は、天皇から将軍宣下を受け、江戸に幕府を開設した。家康は永世安定政権の確立と恒久的平和の維持を推進していくためには、徳川家による強固な統治体制を樹立することにあると考え、政治の長期にわたる安定を基本目標に据え、かつ家康の後継者たちもその政策を踏襲し政権の維持に専念した。その結果、徳川封建体制という政治組織が長期的な安定を得たことは周知のとおりである。しかし、こうした徳川幕府の政権を安定させ維持していくため、社会に対する厳格な統制と外部世界とのかかわりを禁止する措置が講ぜられることとなった⁽²⁾。

それは身分制、鎖国性、参勤交代制という形態をとって具体化されていった。

以下、これら3点をみていくことにする。

(1) 身分制度

徳川幕藩体制は、幕府が全国諸藩を支配している体制である。また幕府によって領地を与えられた諸大名が独立した政治を行ったとはいえ、諸大名をして徳川家に対して永久的に忠誠を誓わせる集権的封建制度でもあった。こうした体制は諸大名を支配し、全国統制を進めるための施策として身分制度を打ち出した。国民全体の身分を世襲によって厳格なまでに固定化した「士・農・工・商」がそれである。士族階級と他の三つの庶民階級の間には一線が画され、武士に対してのみ特典が与えられたのである（政治権力・教育・武道・地位など）。このように幕藩体制下にある社会では、法的に不変化とされた身分ならびに階級構造が厳格なものとなっていった⁽³⁾。

大石慎三郎氏は身分制のもつ特性を次のようにとらえている。江戸時代は日本の歴史上、社会が人工的そして計画的に組み立てられた時代であった。それは、「兵農分離」と呼ばれている支配者である武士、被支配者である農民を軸とした身分制社会が構築されたことを意味す

る。ただし、大石氏は「農」という言葉の意味を農耕に従事する農民という意味に限定せずに、そのなかに商人や職人層も含むと考えている⁽⁴⁾。

こうした武士中心の階級構成であった身分制社会のなかで農民は、土地に縛られ領主に対して年貢を供出する、いわば土地所有者である大名領主の生産手段となっていた。当然土地を離れることはできず、もてる労働力を武士階級から収奪される立場であった。他の庶民も土地の所有権、支配権は認められず、農民に準ずる被支配階級として扱われた⁽⁵⁾。しかし、このようにさまざまな制約をうけつつも、庶民たちはこの時代においてできる限りの創意と工夫を重ね自分たちの旅を続けていった。

(2) 鎖国制

さて、次は鎖国制である。鎖国政策は幕府成立と同時に決定されたものではなく、若干の時間の経過が必要とされた。その政策は寛永10年(1633)から16年(1639)にかけて5回にわたる条例によって実施されていった。鎖国が幕府の政策として遂行されたのは、封建的な土地所有を強化する目的もあったが、何よりも幕府による国家形成の確立を目指したからである。

幕府は鎖国令によって日本人の海外渡航を禁じ、朱印船貿易を厳禁とした。それは信長・秀吉時代に黙認されていたキリスト教を禁じることであった。当時、ポルトガルやイスパニアなどが画策している旧教国の領土拡張路線への歯止めとして重要な意味を持っていた。さらに鎖国制のもうひとつの意義を取り上げるなら、西国大名が海外貿易による経済強化をはかることへのおさえとなったことであろう。結果として、海外貿易は幕府独占となりオランダと中国のみを貿易相手国とし、長崎港を除いてすべての港を封鎖した。こうして鎖国制は政治的、宗教的そして経済的にも徳川政権維持を目指して遂行された⁽⁶⁾。ただし鎖国制は日本の海外市場を狭くしたばかりでなく、日本人商人が海外において貿易に従事することも禁じた。それは諸外国の商品や進んだ技術、また知識の移入をも否定することであった⁽⁷⁾。

(3) 参勤交代制

幕府は大名の改易や転封をおこない、諸大名間の連帯を弱めていった。さらに絶対的権威を諸大名に提示するための方策として、寛永12年(1635)に参勤交代制を義務付け、その制度化をはかった。諸大名はこの制度により、江戸と領国とに一年おきに住むことになり、領国に帰国している間は江戸に妻子を住ませる義務をおわされた。

参勤交代制は諸大名をして公用の旅を強制した。多数の家臣を従え江戸と領国を旅するため多額の費用を支出しなければならず、また江戸滞在中も諸経費がかさみ財政上厳しい状況が生じる大名も多かった。こうして幕府は参勤交代制によって諸藩の経済力を消耗させたのである⁽⁸⁾。

2. 参勤交代制の庶民への影響

(1) 農業経済から貨幣経済への転換

この制度はたしかに諸藩の経済力を消耗させた。しかしその反面、社会経済史的にとらえると、参勤交代制は江戸を政治の中心地として反映させた。さらに17世紀から18世紀には当時の世界でもまれな百万人もの人口を抱える巨大な消費都市へと成長させたのである。人口の半数は武士とその関係者であるが、残りは武士の生活のあらゆる需要に応ずる商工業者たちであった⁽⁹⁾。まさに徳川幕藩体制維持の重要な政策の一つである参勤交代制は、江戸を政治都市として発展させたとともに、参勤交代制の結果もたらされた諸藩の財政難解決のため、年貢米や領国の特産品を中央市場の大坂で商人に販売を委託し、貨幣獲得の方法を講じ、参勤交代にともなう多額の出費を補うようになった。こうして参勤交代制は藩の経済を大坂と結び合わせ、年貢の商品化に基礎をおく貨幣経済を発展させたのである⁽¹⁰⁾。

こうした貨幣経済の生成と発展の流れのなかで、農業経済から貨幣経済への転換が見られ、経済の要を商人が掌握するようになった。それは上で述べたように武士が城下町に居住することによって都市生活と消費生活を営むようになったことに一因がある⁽¹¹⁾。

(2) 町の形成

参勤交代制により、武士たちは城下町に居住することになる。城下町は人工的に構築された都市であるので従来の門前町、宿場町、港町などを利用して改造され、城下町として再出発したという。この結果、城下町は町地、武家町、社寺地などに分類され特定区域に居住する傾向が見られるようになった。たとえば地域分類された町地は、商人や職人が居住する魚町、八百屋町、茶屋町、呉服町、鉄砲町、大工町、河原町、畳屋町、紺屋町などで構成されているのが特徴である⁽¹²⁾。

武士たちは江戸その他の城下町で都市生活者・非生産者としての立場を明確にした。このような特権的非生産者である多数の武士たちの経済的負担を支えたのが主として農民たちであった⁽¹³⁾。

(3) 商人の役割

武士たちの必需品である武器・武具の類、日常生活に欠かせないものを調達し、供給する働きを担当したのは商人であった。江戸期には商業が必然的に発達を遂げることになり、商人社会が城下町を中心に形成されていった。都市の商人たちは、年貢米をはじめとして各地市場間の産物輸送と販売を引き受けるようになった⁽¹⁴⁾。城下町を中心とした領国経済の成立と発展にともない、江戸ばかりでなく、大坂・京都も中央都市として形成されていくことになった。

本節のはじめに商業都市大坂について触れたが、原田伴彦氏の論をもって若干補足しておく。

原田氏は大坂が経済的に発展した理由として次のようなことを考えている。大坂は地理的に水陸交通の要衝である。また17世紀を通じて全国的農産物の生産力上昇と全国的に単一市場が確立したこととかかわって、日本海より下関・瀬戸内海そして大坂に達する西廻り航路が開設され、この航路の発達によって米穀市場の中心が京都から大坂へ移った。さらに大坂蔵屋敷に回漕される蔵物には米ばかりではなく、諸国の特産品も多かった。そして大坂で株仲間が結成されると商業の中心地としての性格が金融の面にもあらわれてくる。この担当者

が両替商であった⁽¹⁵⁾。

次節において、このように制約された社会と経済環境の下に商業と金融を担当し、商業資本家として成長していった新興商人について述べていく。

3. 新興商人の台頭

(1) 豪商の衰退

鎖国と身分制度の確立にともなって商人たちはそのエネルギーを国内に向けていった。それまでの豪商たちは特権商人として活動を続けるか大名貸し等による利子所得者となっていくか、いずれにしても消極的態度で鎖国体制下を歩まねばならなくなった。豪商たちにとってはその事業の大きな転換期を迎えることになったのである⁽¹⁶⁾。そうした状況にあって、国内市場の需要と供給に対応するために台頭してきたのが新興町人といわれた商人層であった。

(2) 社会の安定と新興商人

鎖国体制が確立した後、江戸時代の社会は安定し、都市の急速な発達にともない、商業活動は飛躍的に発展した。各地に大きな商業地が誕生し、貨幣の流通も盛んとなった。それとともに国内市場が拡大し、商業は専門化していった。このような商品生産の発展につれて、農村や地方都市の商人たちと商取引をし、人々の必需品を販売することをとおして自らの力と努力で上昇してきたのが新興商人であった。17世紀から18世紀にあらわれたかれら新興商人は、幕府や諸藩に結びついた門閥的な商人とはその性格を異にした新しいタイプの商人に成長した⁽¹⁷⁾。これら新興商人を生じさせた理由は何か。それはかれらが登場する時代背景を説明することによって知ることができよう。

三都を中心として新興商人が台頭してきた時代は元禄時代であった。江戸前期における景気高揚期であった。国内の交通が発達し、通貨制度も整備され、全国的にも農業・工業生産が進展したいわば経済成長期であった。他方では都市生活者かつ消費者に転化していった武士階層は年貢米や領国の特産物を大坂の蔵屋敷で貨幣に変えなければ

ならなかった。さらにこの時代に金融制度が確立するにつれて高利貸し資本も発展していった。こうして商品貨幣経済は問屋や両替商を生成させ、全国的な商品流通過程で利益を吸収し事業を成長させていったのである⁽¹⁸⁾。

このように新興商人は旧来の特権的な商いの方法に依存する商人を抑え、さらに都市住民の需要を知ってそれに応え、自らも資本蓄積をはかって大商人としての地位を確立していった。たとえば三井家や鴻池家はその代表であろう。新興商人としての三井家は、その初期の時代に幕府との関係をもち、経営の安定をはかったことも見落としてはならない。また一方の鴻池家は大資本を運用するには大名との関係を深めて信用をえることを重要な戦略とし、大名貸しを積極的におこない、貸し倒れのないように資本の運用と蓄積をはかった⁽¹⁹⁾。

第2章 江戸時代の庶民が旅をする目的

前章で概観したように江戸時代は武士を中心とする、ないしは最上位とする身分制の下で、庶民は武士階級を支える存在であった。そのような封建制の時代環境は、その性格から考えても、庶民を一定地に定着させ孤立させておく必要があった⁽²⁰⁾。したがって、他地域への旅が許されるのは、参勤交代や藩の公用によって江戸と領地を往復する武士階級が中心となったことは否定できない。武士集団の旅の便宜をはかるため交通網が整備され、宿場町が発達し、旅の安全性が確保されていたわけである。このように主要街道を旅する限り、安全な環境が幕府や諸大名によって整備された⁽²¹⁾。

では庶民たちは旅することはできなかったのか。たしかに江戸の中期頃までは一般庶民が観光や遊山などの目的で旅することはできなかった。しかし、庶民たちの親や親類縁者が故郷で死亡した、あるいは病気で倒れたなど、緊急の場合は旅も可能であった。また商人のなかには、すでに鎌倉時代から商いのために旅することがおこなわれていた⁽²²⁾。

本章では旅の歴史を近世とは時代環境もまったく異なる古代から中世へ振り返り、旅する庶民たちにはそれぞれ旅する目的があり、また旅の特徴も異なることを確認したい。次に武士の旅、参勤交代の旅を考察しておきたい。それは近世期の庶民層の旅が盛んとなる影響をもたらしたもののひとつと考えるからである。

1. 旅の歴史を振り返る

(1) 古代の旅がめざすもの……生活の旅

自分が居住する土地を離れ、一時期でも他の土地に行くことが一般的な旅の定義ととらえるならば、古代においてその居住区を離れ他の地域へ出かけていくことも旅といえるだろう⁽²³⁾。むろん、江戸中期以降にみられる観光や遊山の旅が目的ではない。それはまさに「生活のために旅する」というべきものであった。生活に必要な諸物資を求めするために、たとえ途中で危険なことがあろうとも他地域へ旅する生活必然の旅と考えられる。

たとえば、われわれの生活に欠かせない塩を、内陸に住む人々はどのように入手したのだろうか。海岸で採取された粗塩（空気に触れると溶解する塩）を内陸部へ運搬してその需要にこたえる。そこに塩を運ぶルートが生じてくる。まさに生活の旅が必要となる。内陸部に住まう人々の塩に対する見返りは、海岸部では入手が困難である毛皮や獣骨であった。海辺に住まう民にとって、防寒用の毛皮や漁の道具は生活必需品であった。こうして古代の流通機構を支えていったのが「塩の道」を旅することであった⁽²⁴⁾。

(2) 中世の旅……困難な旅

近世期をさかのぼること、およそ400年。北条氏が幕府の執権として天下を掌握していた時代では、どのような目的をもって旅がおこなわれていったのだろうか。江戸時代とは比較できないほど道路は不備、また宿すらもなかった時代の旅であった。こうした時代の困難な旅の事例として、ここでとりあげるのは『十六夜日記』の著者である阿仏尼の旅である。以下は今野信雄による『江戸の旅』（岩波書店、

1986年)から引用させていただいた。

「阿仏尼の夫であった為家が死亡した後の領地相続について、実子の為相のため居住地の京都から鎌倉まで下って幕府に訴えることのみを目的に旅をしたことが旅日記として残された。そこにはわれわれ現代人の旅の概念をくつがえす困難な状況が記されている。息子の為相は修験者であり、息子に導かれながらの旅ではあった。しかし、著者の年齢を考えるととても京都から鎌倉までの旅を実行したとは思えない。70歳を目前にしていたという。現代でも60代の後半になると個人差もあるが遠距離の旅は敬遠しがちである。しかも女性であり仏に仕える身でもある。旅のための便利な乗り物とてない時代である。京都から鎌倉までは、およそ500キロメートルを越える距離である。それを一日に平均して35～40キロメートルを歩き、2週間で歩ききったという。旅の途中は相当に苦勞していたようだ。雨が降ると歩いている道も田も見分けがつかず、水びたしとなった。また船をつないで浮橋にしたところをおそるおそる渡り、富士川を越えるときは、川風が冷たく衣服も凍るばかりとなり、寒さのため体が弱ってしまった。とくに、箱根路の下りは険しく、自分の体を止められない。出立は夜明け前であって、仮寝の宿も日暮れてから探す旅であったという。」

このように中世の旅は江戸時代のように街道も宿も整備されておらず、旅そのものが命がけであることがよくわかる事例であった⁽²⁵⁾。

(3) 参勤交代による武士の旅が庶民の旅に与えた影響

近世期となって庶民の旅が容易となっていった理由として武士階層による参勤交代の影響が考えられる。そこで庶民の旅を考察する前段として、参勤交代の旅をまとめておきたい。

幕府は中央集権体制を強化するために、諸大名に参勤交代という役務を課した。江戸と国許に各1年ずつ在住させることであった。この制度は寛永12年(1635)に正式に発足した。時代はすでに豊臣政権が滅亡し、徳川家の天下となって20年の歳月が経過していた⁽²⁶⁾。

江戸では将軍が居住する城のまわりに大名たちの上屋敷、中屋敷、そしてその周辺には下屋敷があった。地方から参勤交代で江戸詰めとなる大名たちは、この江戸屋敷に住まい、江戸城を往復したのである。大名たちの妻子は江戸を離れることを許されなかった。幕府はこれを一種の人質と考えていたからである。こうした人質制度は前田利長が家康に対する忠誠を疑われたことにより、自分の母を江戸に送ったことに端を発したと言われている。以後、諸大名も徳川家への忠誠のあかしとして江戸屋敷に妻子を置いたのが制度化した⁽²⁷⁾。

さて、参勤交代ではどのような旅が続けられたのだろうか。たとえば、各大名たちの石高が異なることは、それぞれの行列の人数も異なることを意味する。

享保6年(1721)の法定人数では、10,000石以上で馬上10騎、足軽80人、中間人足140人。200,000石となると馬上15から20騎、足軽120から130人、中間人足も250から300人の大行列となった。加賀百万石の前田家の場合、2,000名以上の行列もあったようだ。このような参勤交代の旅は、各大名にとって示威行進の旅行列ともなっていて、いずれの大名の行列かが判別されたという⁽²⁸⁾。

こうした大名たちの旅は強行軍であった。朝の出立は午前4時、泊まりの宿場到着時刻は午後8時。通常の旅と比べてみよう。東海道の大津から江戸までを普通に旅すると14～15日はかかる。ところが大名行列の旅は11～12日に旅の日数を短縮する。その理由は旅費の軽減にあった。大名たちは旅の出費を極力抑えて参勤交代に勤めたのである⁽²⁹⁾。

では大名たちはどれほどの旅費を旅に用いようと考えたのか。今野信雄氏の研究によると、鍋島藩(357,000石)は、下関まで徒歩。そこから大坂まで船旅となる。大坂からは再び陸路を取って江戸へ向かう。その片道の旅費が2,600両であった。問題はこの片道料金が藩の年間予算の20%。さらに江戸屋敷の支出(350人余の家臣と使用人)は28%となる。国許の費用は48%、大坂蔵屋敷と長崎警固番の費用が合わせて6%。こうなると支出が収入を超過して藩の財政は赤字と

なる。そこで各藩は節約のため国許から人足を連れて行かずに宿場ごとに調達する。それは人足を国許へ帰す費用が莫大だったからである。

幕府の施策方針は大名を財政的に豊かにしない、幕府に対して謀反をおこすことを絶対に許さない。参勤交代制はまさにその方針を具体化したものであった⁽³⁰⁾。

幕府主導の参勤交代の旅は、街道と宿場を整え、庶民たちの旅を容易にする環境を生み出していった。

自由な旅が許されている環境ではないが、庶民たちに以前の時代と比べると若干の経済的余裕が生まれてくる。さらに街道が整備され、旅籠や木賃宿など旅する条件が整ってくる。それに旅の案内書などが頒布されるようになるとまだ見ぬ土地を歩いてみたい。このような人間が本来持っている旅への思いが住居を離れて旅へ赴かせる。次の2節では近世期における庶民の旅を信仰・物見遊山に分類し、それぞれの特徴を考察していく。

2. 江戸期庶民の旅への接近

前章で指摘したように、江戸の時代環境は武士を中心とする封建社会・身分制社会・米遣いの経済社会ととらえることができる。では庶民の生活や文化からみると江戸時代はどのような社会としてとらえることができるだろうか。

あきらかに三都をはじめとして各地の城下町が生まれ、そこに庶民が居住し日常の仕事に携わることができる社会となった。それ以前の庶民生活は、いつ争乱が起こるかはわからず、安全な生活は保障されていなかった。農民たちは落ち着いて農作業もできない。ほかの庶民層も争乱に巻き込まれ家を失い、仕事もできずに生活困難をきたす状態であった。そうした時代と比べると、江戸時代は平和な時代を歩み始めた社会と、庶民たちには思えた。実はこのような都市の生成と発展、そこでの庶民生活や農村に見る商品経済の発展が庶民たちに経済的余裕をもたらし、旅への誘引となったことは否めない。こうして庶

民層の生活が経済的に安定していくにつれて、彼らが旅する環境は整備されていった。さらに農漁村の人々が出稼ぎに出ることをとおして暮らしを支えることも可能となってきたことも、旅する庶民が増えていく一因となった⁽³¹⁾。

そこで本節では、庶民たちの旅を目的別に分類する。まず信仰の旅、つづいて物見遊山の旅、それぞれの特徴を考察していくことにする。

(1) 信仰の旅

享保期（1716～36）ごろまでの旅は、当時においては、信仰の旅が中心であった。そうした目的をもつての旅に出かけていくということは、次のような意味があった。

町や村の安全と繁栄を祈願するために遠方に所在する寺社へそれぞれの地域代表者を派遣した。いわば、各地域の無事息災祈願を目的とする旅であった。むろん、個人レベルの信仰の旅も存在した。巡礼者の旅はその代表といえよう。

富士山登拝からはじまり、立山参詣、出羽三山参詣など、純粹に自分が信じる神を参拝する信仰の旅をつづけた旅人も存在した⁽³²⁾。

元禄期になると、講などを基盤に全国から多数の人々が伊勢参宮の旅をするようになった。しかしその一方では、参宮したくとも難しい人々が多数存在した。ついに、宝永2年（1705）には、全国から膨大な数の人々が領主の許可を得ずに、伊勢参拝の旅を挙行した。こうした動きは上方の奉公人（子ども）や女性たちばかりでなく、貧しい人々をも多数まきこんで全国に波及し、御蔭参りとなった⁽³³⁾。このような若者たちから始まり、全国的に広まった御蔭参り、あるいは抜け参りと称する旅の特徴は何か。それはこのような信仰の旅の必然を容認する考えを持った人々（おとな）がいたということである。そのように考えている人々は、銭も持たずに参宮だけを目指す若者たちに、その旅先で食事や宿を提供し、あるいはいくばくかの銭を喜捨してかれらの旅を助けた。またかれら若者たちと同じ信仰の旅を目指す他の旅人もこうした若者たちを助けた。信仰の旅を続けるための銭を

もたない若者や子どもたちにとって、沿道に住まう人々の助けがなければ、その旅は困難を極めたことだろう。

また、当時のおとな社会は、こうした旅を子どもが成人するために通過する一種の儀礼と考え、かれら若者の抜け参りを応援したのであろう⁽³⁴⁾。

横道にそれるがここで旅の費用について述べてみよう。江戸から伊勢までの参宮費用は片道でいかほどの路銀を必要としたか。

先ず、江戸から伊勢までが12泊となる。その料金は、1泊480文。昼食代が200文。しめて1日680文かかる。12泊として8,160文が片道の費用となる。そのほかに、わらじ代や川を渡る渡し代も必要となる。そうした雑費を含めると片道2両余となり、現在の80,000円程度と見積もることができる。信仰の旅もかなりの経済負担となったようだ。しかし、費用をできる限り抑える旅を考えるならば、旅籠には泊まらずに、木賃宿に泊まるという方法もあった。こうして見てくると旅の費用については、旅する現代の庶民もふところ具合と相談し、ビジネスホテルにするか、もっとランクが上のホテルにするかを思案するのと同じであり、各人各様で違いがあるのは当然である⁽³⁵⁾。

さてもう一点、信仰の旅について述べておくことがある。旅に必要な通行手形のことである。信仰の旅、伊勢参りは通行手形を受けるもっとも安易な方法であった。なぜなら、江戸幕藩体制は神仏信仰を重視し、これを行政に生かしていたからである⁽³⁶⁾。つまり、伊勢に行かない者であろうと参詣を口実に手形の発行を受ければ、旅が可能となるということであった。たとえば、伊勢に少しだけ立ち寄って、その後は、京や大坂見物をするのができた訳である。江戸中期以降ともなると、信仰の旅・参拝の旅が目的だが、そこに多分に娯楽的要素が加えられて信仰の旅そのものが変容していったのである⁽³⁷⁾。

(2) 物見遊山の旅

享保期以前の庶民の旅はやはり信仰の旅が中心であり、遊山の旅は稀であった。ところが享保期より時代が下るにつれて、東国に在住する町人や農民たちの伊勢への信仰の旅が拡張され、伊勢より遠方の金

毘羅や西国三十三所を回るようになった。その帰りには著名な寺社に詣で、同時にその途中にある名所も訪ねる。こうした旧跡を見学することや旅の途上でのさまざまな見聞は、庶民たちが旅を通じて社会を学び、知識を増やす大切な機会となった。たしかに信仰・参拝中心という旅の目的は変化してきた⁽³⁸⁾。やがて、このような信仰の旅から得たさまざまな情報のなかから、信仰以外の休養や遊山も含めて旅行地をとらえるようになった。また旅の技術というか、より良い旅とするための知恵や工夫が積み重ねられることによって、さらに旅が盛んとなっていった⁽³⁹⁾。それはこの時代以降に、多くの旅に関するガイドブックが出版されたことから理解できよう。

江戸時代後期（文化・文政期）になると庶民の旅の目的も遊山へと大きくシフトする。有名な安藤広重は「道中風俗」（『東海道風景図会』）のなかでさまざまな旅人を描いているが、庶民の旅は遊山の旅として描かれている⁽⁴⁰⁾。このような遊山の旅についての楽しみの一つとして、寺社への参詣と温泉で休養することがあった。とくに農民たちは農閑期を利用して春先に温泉湯治の旅に出ることが多かった。江戸では箱根が湯治場として有名となり、伊香保や草津、熱海などとともに大衆化していった⁽⁴¹⁾。

ところで、商人たちは物見遊山の旅をどのようにとらえていたのだろうか。大商家三井は、このような目的の旅をむしろいさめている。三井家の家訓『宗仁遺書』に「勤儉以て家を富まし、驕奢以て身を滅す、此を勤め彼を慎まざるべからず、是れ同族の繁栄と子孫長久の基なり」（第一勸銀経営センター『家訓』株式会社中経出版、1981年、p408参照）といった戒めがあり、働き盛りの者が物見遊山などはとんでもないことであった。旅に対する考え方や目的も商人の世界では他の庶民層とは異なっていたことを考えさせられる⁽⁴²⁾。

第3章では商人の旅の特徴を人・モノ・カネ・情報という視点と行商人の旅からその特徴を探ってみることにする。

第3章 行商人たちの旅

江戸時代の商人は、第1章で述べたように、身分は最下位に位置づけられた。やがておだやかな都市生活がすすむにつれ、経済を動かす実力をあらわすようになった。18世紀の田沼時代になると貨幣経済が盛んとなり、年貢による自然経済をしのぐほどとなってきた。つまり経済の世界では商人が武士階層を越えたということである。当然ながら武士たちはこのことに強く抵抗していった。それは18世紀初期におこなわれた八代将軍吉宗による享保の改革にあらわれた。また18世紀後期にみられる寛政の改革は白川藩主松平定信によるものであった。水野忠邦が中心となって幕府の権力強化を目指した19世紀中期の天保の改革も同じような趣旨でおこなわれた。しかし、いずれの改革も武士側の敗北となった⁽⁴³⁾。こうして商人たちの経済力が江戸の社会の前面に現れるのは、享保期以降からであることがわかった。商人たちの経済力は武士階層ばかりでなく、江戸庶民層の生活、価値観、思想、芸術など幅広い分野にも大きな影響を与え始めた。まさに商人たちが商品経済、流通、交通において武士階層になくてならない存在となり、主導権を握るようになったからである⁽⁴⁴⁾。

以下、本章では、人・モノ・カネ・情報を中心に、ビジネスを目的とした旅が盛んになっていくことを考察する。また行商人の旅をとりあげ、その特徴を考察することにする。

1. 商人旅の動向とその特徴（人・モノ・カネ・情報の動き）

1600年代の後半から幕末にかけて、江戸と大坂・京都との関係は、人や商品流通ばかりでなくカネの流れも活発化させ、それにともなって江戸と上方間の情報のやり取りも重要視されるようになった⁽⁴⁵⁾。このような江戸と上方間における商人たちの密接な関係を林玲子氏の『江戸と上方 人・モノ・カネ・情報』（吉川弘文館、2001年）の研究に拠り、順次みていくことにしよう。

まず人の動きである。当時の商人たちは、上方に本店をおき、江戸に支店を設けることがひとつの流れであったことから、上方の本店（主家）の経営者と江戸支店で主家のために働く番頭以下の奉公人たちとを結びつける存在が必要であった。その役割を果たしたのが、江戸・上方間の商品輸送を扱う商人たちであった。彼らはその業務の関係上、海上輸送の旅が中心であった。藩に束縛されていた武士たちとは異なり、このような商人は、船や荷駄を中心とした商品の運搬を取り扱ったことから広範囲に動き回ることができた。つぎにモノの動きであるが、商品という大切なものを取り扱うのが商人たちの仕事の中心であった。藩の経済を支配し、その産物を売り込むのはたしかに武士であった。しかし、武士自身が利益を上げるビジネスを展開するまでにはいたらなかった。なぜなら武士たちは、大坂市場と江戸市場の間に見られる生産地や消費地の状況の変化を知る由もない。いま江戸の消費者が何をのぞんでいるかなどはわかるはずもない。まして、商品の価値や値段の動きなどビジネスの全体を細かく観察し、そこから利益を上げていくことはできないからである。商人たちはその仕事の立場と自分たちのビジネスのために、損失をいかにしたら出さずにすむかをつねに意識する。いやもっと利益を得るためには、どの船頭や水夫を雇用するかを考える。そのために海上輸送の商人たちとのかかわりを重視するのはこの利益のためであった。

商品の値段や量、需要など、商人たちが取り扱う商品のあらゆる動きに直接反応するのはカネである。ビジネスに必須のカネについてみていこう。

新しい店を江戸や大坂・京都に設置し、そこでの奉公人たちの手配と労務管理、また遠隔地間の商品輸送をおこなうにしても、必要なものはカネであった。そうした資金は、金貨、銀貨、銭が基本的に用いられ全国に流通し、上方と江戸が経済的に深く結びついていった。大坂市場では銀貨が主として流通し、江戸では金貨が商人の間で用いられ、あまり金貨と縁がない庶民たちは銭が中心であった。

最後に情報である。当時は、現代のようにビジネスやその他の重要

な情報を容易に伝達することはできなかった。しかし、その代わり手紙のやり取りは多く、とくに商人間の書状は量的にも多くみられる。飛脚問屋はまさに庶民の情報伝達に対応した庶民が生み出した新しいビジネスだ。そこでは書状だけではなく、小荷物も扱った。金銀などの決裁も為替を組むことでおこなうことができた。こうした方法はまさに、商人間の信用が基礎となった重要な制度であった。また、庶民たちは上方と江戸間の往来をした人たちの話を聞いて情報源とした。あるいは帰郷した人たちが語る旅先のさまざまなことがらや土産話などを「覚書」風に文書として記録し保存した。このように庶民たちは「旅日記」の形で、自分たちが見たことや聞いたこと、体験したことなどを書き残すことが、ある種の情報となって地方に伝達されていった⁽⁴⁶⁾。

2. 商人旅の原点

ここでは行商を商売の基礎にすえる商人の旅に焦点をあて、その特徴を探っていく。またより明確にかれら行商人の旅の特徴を浮かび上がらせるために、いわゆる商人層のなかでも大店といわれる商人たちの旅について述べていくことにする。

(1) 行商人の旅

行商人の旅はいったいどのような旅であったろう。行商という語の意味からしても、なんらかの商品を持って家々を訪ね、その商品を販売する。あるいは、地方に出かけて商うところの旅商い⁽⁴⁷⁾を生業としている商人層であったと考えられる。

行商人として著名なものは越中富山の薬売りである。江戸期には各地にその商圈を拡大させた薬売りの商いの方法こそ行商であった。その経営の特徴は、通常の商売にみられる店舗・売薬の形態をとらないところにある。得意先の家を訪問し、そこに預けてある薬を服用した分だけの代金を受け取り、残った薬は新しい薬と入れ替えておく方法である。富山ではこのような商いの方法を「先用後利」と称し、富山売薬業の発展に重要な役割を果たしたといわれている。富山の売薬業

者による販路開拓は、元禄～享保期（1688～1736）にかけておこなわれた。さらに、宝暦～明和期（1751～1772）あたりになると、すでに全国的な販売網に成長していった。また売薬行商に従事する行商人の数は2,200人を超え、年間の売り上げも200,000両を記録したといわれている⁽⁴⁸⁾。

2,000名を超える売薬行商人たちが全国の販売先に、まさに商用の旅を毎年あくことなく続けていくのであるから、行商人たちに間違いがおこらないように、また仲間の営業が守られるためにも、さまざまな規定が設けられていた。ここでは富山以外の地方売薬業の規定を紹介しておこう。以下は、深井甚三氏の『江戸の旅人たち』（吉川弘文館、1997年）の研究に拠る。

文政12年（1829）の「仙台売薬仲間定書」には、博打の禁止と宿料の規定がある。嘉永5年（1852）の「関東射水組仲間規定」には、旅先での病気、言いがかりをつけられた際の仲間による助け合い、飲酒や女遊び、悪事の禁止などの決まりごとが記されている。また、文久3年（1863）の「上総・下総仲間の定」には、国元の恥になるとして、雇い主の暮らし方や売り子自身の稼ぎなどを宿で話すことを禁じている。さらに旅先での藩の法令を守るため、藩が禁じている宗旨の話、出所不明の唐薬購入はこれを禁じた。

売薬商人の旅に同行した村役人の視点で観察した行商の旅に関する道中記によれば、この売薬商人の販路は飛騨から信濃・越後・奥州・上野・武蔵を回るのだが、ともかくも足が速い。たしかに薬はかさばらず軽量である。しかし、各地の販売先を訪ねて薬の入れ替えをしながらの旅である。したがって相当の量の薬を持参していく。そこには無論工夫がなされており、あらかじめ旅先に薬荷が届くよう手配されていることはいうまでもない。反魂丹以外にも種々の薬を扱っていた様子が『道中記』に記されているとのことである⁽⁴⁹⁾。

行商の旅に出て行った夫の代わりに留守を守る家族たちは、どのような日常を過ごしていたのだろうか。

夫と妻は1週間に1度の割合で手紙をやりとりする。生活費は毎月、

旅先から家まで送り届けられた。妻はその金でやりくりしながら、家計簿をつけ上手に暮らしをたてた。また薬の袋張りや紙風船づくりの内職に励みながら行商の旅に出ている夫の帰りを待った。

ようやく師走になって夫は国元に戻り、正月の松の内あたりまでのんびりと過ごす。しかし、春の行商のための準備でその日常は忙しかったようである。販売商品である薬の調剤をし、製品化する手作業がかれらを待っている。さらに、薬袋の新しいデザインを自分で考案しなければ顧客に飽きられてしまう。経営の最先端で、競争優位の世界を戦っているからである。自分で調合して製品となった薬の袋詰めも自分の手で行わなければならなかった。年1回の行商の時もあるが、通常は春と秋の年2回廻りが一般的であった。

かれら行商人の旅は、まさに商売、仕事のために旅に出る。無論、旅先で危険な目にあうことを避けなければならない。売り上げも伸ばさなければならない。常にさまざまな規定の下で商いを続けていかなければならなかった。行商人にとって、旅はビジネスそのものであり、生き方そのものであった。旅を楽しむわけにはいかない。

行商人の旅の服装について少しだけ述べておく。その旅姿は次のとおりである。まず長着物を腰のあたりで折り、博多の角帯をしめる。そこに前垂れをつけ、草鞋をはく。羽織代わりに厚司を着込む。背中には風呂敷で包んだ大きな柳行李を背負う。頭には菅笠、手には手甲をつけ、道中脇差を腰に差す者も多かった。懸場に到着後は必ず定宿にはいり、ここを通じて藩の「鑑札」を受け取る仕組みとなっていた。ここから営業活動がはじまり、終了すると別の販売地域へと向かう旅が再開される⁽⁵⁰⁾。

(2) 近江商人にとっての行商の旅

富山やそのほかの地域への行商の旅について述べてきたが、ここで近江商人のビジネスの旅を考えてみたい。

近江商人にとって行商とはなにを意味したのだろうか。内橋克人氏はこれを四点にまとめている。第1は自分の足で歩くことである。歩くことで市場ニーズをとらえ、土地・風土・住民の気質などを知って顧

客との信頼を築く。第2に合理的物流ネットワークを作る。往路は近江の特産品を運び、売りつくした後に、帰路はそれぞれの土地の産物を仕入れた。第3は商機あるところ土地を選ばず。道路こそ地の利である。歩くための道路が重要であった。第4は行商に出るときは、故郷に妻や子を残し、余分な路銀を持たず質素な衣服と食糧に耐え、時には野宿して行程を乗り越える。こうした行商の形態は、待ちの商いである座商に対して、手間も暇も惜しまない攻めの商いであり、つらい行商から「勤勉・儉約・正直・堅実」という近江商人の経営精神が生まれてきたと指摘する⁽⁵¹⁾。

近江商人のなかでも日野商人たちの旅の技術は、合理的である。いわゆる「定宿制」である。日野商人ならいつでも泊まれる特約のある宿であり、安心して気持ちよくビジネスの旅ができる。こうした制度は、幕藩体制下での宿泊の困難さを解消する具体的な方法であった。庶民たちは、どんな急な場合でも普通の民家に泊まることは許されず、親類、身内の者でも役人に事前に届けがなければ宿泊させることはできなかった。日野商人はその仲間が中仙道・東海道の宿場に「定宿」を決め、旅するときは「日野大当番定宿簿」を携行し、この宿を利用した。また旅籠や商人宿ではないが、商家が得意先の人を泊めることが許されているのもあった。たとえば、近江商人として有名な中井家の出店の毎年の決算書である「店卸目録」の収益項目に「泊賃」がみられる。料金を取って泊めていたのである。ただし日野商人の「定宿」の場合は、専門の宿屋か、商家の兼営なのかは、店の名前だけでは判断できない⁽⁵²⁾。

(3) 大店の商人の旅

庶民層のなかでも大店といわれた商人たちの旅は、贅沢に尽きたようだ。たとえば、当時1,000両の有する価値は、3,000石の旗本が1年間に要する生活費に相当する。旗本には養うべき家族（妻子）、中間、女中、下働きの男女などをあわせると10数人の大所帯である。つまりそれだけの人間を養うだけの価値を1,000両は持っている。

ところが、江戸のある豪商の妻は1ヶ月余の伊勢参りの旅で、1,000

両を使い果たしたということだ。旗本の1年間の生活費に相当する大金であり、参勤交代による公用の旅を強いられる武士たちでさえ、商人たちから金を借りなければならない状況であった。信仰の旅とはいえ、比較にならない浪費である。1,000両を妻の伊勢参りの旅に投げ出すぐらいの資産を蓄財していた江戸期の豪商の経済力をここに見ることができよう⁽⁵³⁾。

むすびにかえて

近年、江戸時代の旅に関する文献を目にすることが多い。そこには徳川幕藩体制という社会環境の下に生活する武士や庶民たちそれぞれの特色が描かれていて興味深い⁽⁵⁴⁾。

争乱と混迷が続く戦国の時代を垣間見た人びとには、想像することができない平和な時代が徳川家によって社会にもたらされた。それが江戸という時代であった。平和な時間の流れは、農業の発達とその生産の向上をもたらし、その結果、商品貨幣経済の世を進展させることとなった。さらに、江戸・大坂・京都に人びとが集まり、都市が形成され、生活の拠点となった。また、各地の都市にも賑わいと経済効果が波及する。このような社会経済的環境が庶民の旅を容易にしていた。

元禄の時代になると、庶民たちも旅を楽しむようになってきた。旅の在り方に変化が生じてきた⁽⁵⁵⁾。

本稿では、そうした庶民たちの旅に焦点をあてつつ、商人の旅について論述を進めてきた。

商人を除いた庶民層の旅は、おおむねその目的からみても信仰の旅が中心であった。しかし、やがてそこに遊山が旅の目的に加わり、信心と遊山を合わせ持った性質の旅を楽しむようになった。それは、幕藩体制という制約の下で、かれらなりの精一杯の自由を旅という形で表現したのではないだろうか。しかし、現実には庶民にとっての旅は、一生の間に数回といった程度のものでしかなかった⁽⁵⁶⁾。

一方、商人たちの旅は、前述した庶民層のそれとは一線を画する旅であった。それは、旅する目的がビジネスにあるということだ。そこには、旅を楽しむという思想は入らない⁽⁵⁷⁾。否むしろ、商用の旅には危険がつきまとうから注意を怠らぬようにという定めをつくり、危険から身を守るための旅の心得について、商人なりのリスクマネジメントを発動している。それは「定宿」を設け、ビジネスの旅に必要な宿泊場を確保し、その身の安全と商品流通のスピード化を図ることにあらわれている。

江戸期における庶民の旅・商人の旅から教えられることは、旅の在り方や旅の方法は現代のそれとは異なり、あくまでも基本は歩くことである。旅への準備もそうだが旅をするには時間がかかること。また費用もかさむ。しかし、庶民なりにさまざまな問題や壁を乗り越えて旅に出かけていく。そうしたかれらのバイタリティの源にあるのは何か。まだ答えは出てこない。

近世江戸期の庶民の旅・商人の旅は、まさに旅に関する知恵と工夫と改善のなせる業である。かれら商人を含む庶民層が、あの近世期にしたたかに生きてきた証しをかれらの旅は示している。

企業家としての飛驒屋の商用の旅も興味深い。これからの研究課題としたい。

注

- (1) 宮本又次編『日本経済史』（基礎経済学体系 5）青林書院新社、1977年、p47。
- (2) 奈良本辰也監修・高野登『読める年表』（江戸編 1）自由国民社、1984年、p5、J. ヒルシュマイヤー・由井常彦『日本の経営発展』東洋経済新報社、1977年、ならびに M.Y. Yoshino “*Japan's managerial system : tradition and innovation*” MIT PRESS、1968、内田幸雄監訳・今井謹吾・小池澄男・倉井武夫・工藤道彦訳『日本の経営システム—伝統と革新—』ダイヤモンド社、1975年、p5 参照。
- (3) J. ヒルシュマイヤー・由井常彦、前掲書、p5～6 ならびに内田幸雄監訳・今居他訳、前掲書、p6 参照。

ここで武士を除いた三つの階級について補足をしておく。武士階級以外は庶民であり、いわば被治者である。「農」についてみれば、農民は米その他の食料の生産者であり、武士の支配する土地で働く民である。貢租を出して武士をまかなう義務を課せられていた。『工』と『商』は町人階級をさす（加田哲二『日本社会経済思想史』慶応通信、1962年、p11による）。

- (4) 大石慎三郎『江戸時代』中央公論社、1977年、p66。
- (5) 原田伴彦『日本町人道』講談社、1968年、p21～22参照。
- (6) 藤田貞一郎・宮本又次・長谷川彰『日本商業史』有斐閣新書、1978年、p17、作道洋太郎『江戸時代の上方町人』教育歴史新書、1978年、p164ならびに正田健一郎・作道洋太郎編『概説日本経済史』有斐閣、1978年、p69～70による。
- (7) 土屋喬雄『日本経済史概説』東京大学出版会、1976年、p42。
鎖国に関する論議では、消極的側面が強調されがちである。ここでは積極的側面について若干展開してみよう。それは本稿の庶民の旅の活性化ともつながる重要な事柄であるからだ。徳川時代から明治維新に至るおよそ2世紀半の間に西欧では、封建体制ないし絶対主義体制から近代的民主主義政治へ移行し、1760年代に始まった産業革命は完成し、機械制産業が発達していた。たしかに西欧と比べると政治・経済両面において遅れてしまった。だが西欧諸国には類例のない平和と参勤交代制により鎖国期間中に農業や商業の発達がみられ、貨幣と商品経済が盛んとなったことは見落とせない（同書、p42～43参照）。
- (8) J. ヒルシュマイヤー・由井常彦、前掲書、p7、井上周八『日本資本主義のあゆみ』青木新書、1968年、p22～23参照。
- (9) 同上2書、同ページ参照。
- (10) 私立大学通信教育協会『一般教育・歴史（改訂）』1983年、「第2章江戸幕府の成立」（p143）、宮本又次編『日本経済史』青林書院新社、1977年、p59参照。
- (11) 加田哲二、前掲書、p30～31参照。
- (12) 作道洋太郎「江戸期商人の系譜と特質」（作道洋太郎・宮本又次郎・畠山秀樹・瀬岡誠・水原正亨『江戸期商人の革新的行動』有斐閣、1978年）p11参照。
- (13) 土屋喬雄、前掲書、p50～53、内田幸雄監訳今居他訳、前掲書、p5参照。
なお庶民たちの階級的特徴に関しては、(3)を参照。ここで注目しておきたいのは商人階級である。商人たちは他の階級と比べて非生産者と考えられ、階級も最下位である。その理由を原田伴彦氏は三つにま

とめている。

①商人の社会的地位は中世以来低い。② 蔑視思想の残存。③ 商人を不道德とみなす。ただし、注意すべきは、第③の理由が主張された時期と元禄から享保にかけての経済的発展期が一致していることである。原田氏によればこの時期は、封建体制の矛盾が表面化して身分制に動揺が見られ始めたころであり、商人の社会的地位向上がその経済的繁栄を背景としていることなどが目立つ時期でもあり、封建支配者が商人を抑えようとする意図を反映したのが③の理由である（原田伴彦、前掲書、p25～30に拠る）。

- (14) J. ヒルシュマイヤー・由井常彦、前掲書、p14、ならびに堀江保蔵編集『本庄先生古希記念 近世日本の経済と社会』有斐閣、1958年、p12参照。江戸時代になると、各種商人の専門化が始まった。輸送・保管や商取引が未分化であった問丸に機能分化がおこり、積荷問屋、荷受問屋、廻船問屋、米問屋、油問屋、炭問屋など専門の問屋があらわれてきた。また問屋と小売、生産者の荷主と問屋の間における取引に介在する仲買も生まれてきた（宮本又郎「日本型企業の起源」宮本又郎他『日本経営史』有斐閣、1995年）p17参照。
- (15) 原田伴彦、前掲書、p54～56参照。
- (16) 源了園「江戸期豪商たちの倫理」（『太陽』一特集日本の豪商一、平凡社、1974年・11月号）p86、ならびに竹内宏「花ひらく豪商の世紀」（竹内宏概説『豪商の登場』ティービーエス・ブリタニカ、1984年）p19参照。なお作道洋太郎「江戸期商人の系譜と特質」前掲書、p16も合わせて参照。
- (17) M. Y. Yoshino、内田幸雄監訳・今居他訳、前掲書、p18、私立大学通信教育協会、前掲書、p166～167参照。
- (18) 作道洋太郎『江戸時代の上町人』教育社歴史新書、1978年、p16～17、加田哲二、前掲書、p43～44、宮本又次『豪商』日本経済新聞社、1970年、p10～11参照。
- (19) 安岡重明編『日本財閥経営史』日本経済新聞社、1982年、p24～25参照。
- (20) 樋口清之『旅と日本人』講談社、1980年、p93参照。
- (21) 深井甚三『江戸の旅人たち』吉川弘文館、1997年、p212。
- (22) 樋口清之、前掲書、p20、p93参照。また、西川武臣「宿場と街道」（『日本歴史館』小学館、1993年、p788～789）参照。たとえば近江商人の営業形態の歴史は古く、鎌倉時代から一部の商人たちは積極的に他国との交易をおこない、室町時代にはその交易はさらに拡大した。しかし、近江商人による行商はまだおこなわれていなかった（邦光史郎

- 編『ニッポン商人の誕生』有斐閣、1983年、p143)。
- (23) 新村出編『広辞苑』(第4版第1刷) 岩波書店、1991年、p1603。
- (24) 今野信雄『江戸の旅』岩波書店、1986年、p5～6参照。
- (25) 同前書、p3より引用。
- (26) 同書、p50参照。
- (27) 西山松之助『江戸ッ子』吉川弘文館、1980年、p11、岸井良衛『東海道五十三次 百二十五里・十三日の道中』中央公論社、1964年、p15～16、また今野信雄、前掲書、p50～51もあわせて参照。
- (28) 今野信雄、前掲書、p50～51。
- (29) 同書、p52。
- (30) 同書、p52～53参照。
- (31) 深井甚三、前掲書、p212～214参照。
- (32) 同書、p55～56参照。
- (33) 同書、p88～89参照。
- (34) 同書、p89～90参照。どれくらいの人が抜け参りをしたのだろうか。宝永2年(1705)4月21日から一ヶ月間、京都所司代が洛中通過の参詣者数を調査した。1歳～5歳では1,115人(ただし5歳までは抜け参りではなく、親召連参候とのこと)。6歳～16歳では18,536人を数え、この年代が抜け参りである。17歳以上は31,912人。合わせて51,563人。そのうち男は30,345人、女は21,218人であった。この数字をとおして教示されるのは、およそ三分の一が16歳以下の子供であったということだ。当然、子どもたちの安全がすべて守られたわけではない。文政13年(1830)には、人買い船事件もあったという(今野信雄、前掲書、p86～87参照)。
- (35) 樋口清之、前掲書、p165～166参照。木賃宿の特徴は、米を買って薪代を払い、そこで自炊をするという宿をさしている(児玉幸多他編集顧問『江戸時代の交通と旅』雄山閣出版株式会社、1982年、p120参照)。
- (36) 樋口清之、前掲書、p193参照。
- (37) 同書、p93～94、今野信雄、前掲書、p78～79参照。信仰の旅そのものが純粹に重視されてきたのは、享保ごろまでといわれている。むろん中期以降にも信仰の旅は続けられた。しかし、物見遊山も旅の目的に加えられた(深井甚三、前掲書、p55)。
- (38) 深井甚三、前掲書、p53～54参照。
- (39) 樋口清之、前掲書、p108～109参照。
- (40) 深井甚三、前掲書、p53参照、たとえば旅の心得というものを記した

八隅蘆菴、桜井正信訳『現代訳 旅行用心集』（八坂書房、2001年）ならびに猿猴庵『江戸循覧記』文政11年、1826（樋口清之監修『ヴィジュアル百科江戸事情 第1巻生活編』雄山閣出版株式会社、1991年、p380参照）がある。

- (41) 樋口清之監修『ヴィジュアル百科江戸事情 第1巻生活編』、p164参照。
- (42) 樋口清之『旅と日本人』講談社、1980年、p111～112参照。『宗竺遺書』に関して補足しておく。三井三百年の基礎は、初代高利が築いた。高利没後、一族の結束が乱れず成長を続けたのには、二代高平（宗竺）の人格と力量によるところが大きい。高利は越後屋呉服店の創業にあたって、長男の高平を店主に定め、その活躍に期待した。高平はこれにこたえ、主として京都の仕入先の責任を負い、堅実商法によって京都の呉服卸商筋の絶大な信用を得ていった。元禄7年（1692）初代高利の死後、繁栄の具体的措置が宝永7年（1710）に設置された「大元方」制度であった。その運営の基本を定めたものが「宗竺」の制定であった（吉田豊『商家の家訓』徳間書店、1973年、p80～86参照）。
- (43) 邦光史郎編、前掲書、p26～28。
- (44) 同前書、p26～27、大石慎三郎『江戸時代』中央公論社、1977年、p178参照。
- (45) 江戸日本橋の大店であった白木屋の『問屋株帳』には、その株仲間である呉服問屋55人の名が記されており、そのうちの4割近くが京都在住であったという指摘がある。いわゆる江戸店持商人である（小川幸代「商家文書 白木屋に見る商人の文書」林英夫・青木美智男編『事典しらべる江戸時代』2001年、柏書房株式会社、p754～755参照）。こうした点からも上方の商人と江戸の商人の関係の深さが理解できよう。
- またこのような江戸店には、どの店も女は一人もおかず、越後屋、白木屋、高島屋、松坂屋、西川、長谷川など男ばかりの店であった。近江や伊勢の本店近くの田舎から出てきた年季奉公人の少年たちが入れ替わりに江戸店で奉公する。しかし、店は繁栄しても江戸店は常に本店を向いていた（西山松之助『江戸ッ子』、p11～12参照）。
- (46) 以上の人・モノ・カネ・情報に関する記述は、林玲子氏の『江戸と上方人・モノ・カネ・情報』（吉川弘文館、2001年、p189～191）に拠る。また旅日記については、たとえば伊勢神宮に旅したときに記録した日記などが各地の村方文書に残されている。これは近世の旅の代表ともいえるのが参詣の旅・信仰の旅であったことを示していると思われる。そうした旅では、『代参』として、村役人の家の者や講で選ばれた者

- が伊勢へ参詣したときの記録を旅日記として残している（青木美智男「旅日記」林英夫・青木美智男編『事典しらべる江戸時代』、p572 参照）。
- (47) 新村出編『広辞苑』（第四版）、岩波書店、1991年、p669 参照。
- (48) 八隅蘆菴、桜井正信訳『現代訳 旅行用心集』前掲書、p182～183 参照。富山の売薬が有名となり、その企業価値が高まったのは、「江戸城に参勤した大名の一人が腹痛をおこしたとき、富山藩主が印籠の反魂丹を渡したところたちどころになおった。その効能に驚いた各大名が領内への配薬を懇請したことが始まりと伝えられ、幕末には行商人は5,000人に達していた」との指摘がある（高瀬保「特産物の登場」『日本歴史館』前掲書、p685 参照）。
- (49) 深井甚三『江戸の旅人たち』、p44～45 参照。またこの「道中記」は、深井甚三氏の研究では、『内山逸峰集・享保—安永』（岡村日南子編集）に拠る（同書、p44～46 参照）。
- (50) 邦光史郎、前掲書、p193～196 参照。
- (51) 内橋克人「概説—近江・伊勢商人にみる商いの原点」（内橋克人概説『日本の商人 第3巻 近江・伊勢の商人魂』ティービーエス・ブリタニカ、1983年、p10～14）参照。
- (52) 小倉栄一郎『近江商人の開発力』中央経済社、1989年、p69 参照。
- (53) 今野信雄、前掲書、p53～54 参照。
- (54) ここでは2000年以降に出版された主な文献を挙げておく。深井甚三『江戸の宿 三都・街道宿泊事情』平凡社、2000年。今井金吾編『図説東海道五十三次』河出書房新社、2000年。梶原勝「宿場と街道」（江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房、2001年。前田淑編『近世女人の旅日記集』葦書房、2001年。林英夫・青木美智男編『事典しらべる江戸時代』柏書房、2001年。林玲子『江戸と上方 人・モノ・カネ・情報』吉川弘文館、2001年。八隅蘆菴、桜井正信訳『現代訳旅行用心集』八坂書房、2001年。神崎宣武『江戸の旅文化』岩波書店、2004年。ヘルベルト・プルチョウ『江戸の旅日記』集英社、2005年。松岡満『東京時代MAP 大江戸編』光村推古書院株式会社、2005年。石川英輔『ニッポンの旅—江戸達人と歩く東海道—』株式会社淡交社、2007年。このほかに、2000年以前に発行された文献ではあるが、江戸の旅に関しての基本文献を3冊挙げておく。新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、1971年。今野信雄『江戸の旅』岩波書店、1986年。深井甚三『江戸の旅人たち』吉川弘文館、1997年。
- (55) ヘルベルト・プルチョウ『江戸の旅日記』集英社、2005年、p15～16。

- (56) 樋口清之、前掲書、p109～110。
- (57) 三井家の家訓としてその運営の基本を定めたのが三井高平による『宗竺遺書』であった。そこには一族永遠の繁栄を願い、きびしい自立と自制が求められている。商用の旅はあくまでも商いを目的とする（吉田豊『商家の家訓』徳間書店、1973年、p80～86）。